

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」(コロサイ1:6)

【巻頭言】

「結び目を作っていく働き (JEA 宣教フォーラムを通して見えてきたこと)」

JEA 理事・宣教委員会委員長

日本ホーリネス教団横浜教会牧師 中西 雅裕

「また、キリストを基として、全身はすべての節々の助けにより、しっかりと組み合わされ結び合わされ、それぞれの部分は分に応じて働き、からだを成長させ、愛のうちに育てられていくのである。」(エペソ人4:16)

7年ごとに開催される日本伝道会議を繋ぐ意味で、JEA(日本福音同盟)宣教委員会では毎年宣教フォーラムを主催しています。その宣教フォーラムの働きを通して教えられている今後の展望を記します。

2011年の東日本大震災以降、秋田・仙台・福島で宣教フォーラムを行いました。被災地でもたれた宣教フォーラムから見えてきたのは、ネットワーク作りの大切さということでした。岩手に於いては顔見知りの牧師たちの声かけによって沿岸部への物資援助が始まり、宮城では地域ごとの宣教ネットワークが積極的に活動しています。福島に於いては放送伝道の協力関係が母体となって、福島県キリスト教連絡会が立て上げられ、人々に希望を届けています。キリストを基とした協力関係の「ネットワーク」が、地域での福音宣教の鍵になっていくことを教えられています。

2014年に東京でもたれた宣教フォーラムでは、キリストを基とした協力関係の構築の大切さについて話し合われました。キリストの身体が語られている<エペソ4:16>には「すべての節々の助けにより」とあります。「節々」はそれぞれの働きが、存在が、出会うところです。その部分が強められる必要があります。そこに「助け」というお互いを思い遣り、協力し合おうとするキリストの愛が必要なのです。そこに「結び目」が生まれます。結び目の重要性です。また主にある結び目を積極的に作っていく努力も大切であることを教えられました。教会の伝道牧会に於いても、教会員と教会員、働きと働きが次々と結び合わされていくことによって、その母体である教会が強められ御業が進められているように、今後の日本に於ける宣教に於いても、この結び目が鍵となっていくのだと教えられました。

2015年は「関西の協力伝道の『これまで』と『これから』」というテーマで「関西宣教フォーラム in 大阪」が開催されました。このフォーラムでは、近畿福音放送伝道協力会や大阪宣教祈禱会などの協力が活発に行われてきた大阪において、今までどのようにネットワーク作りがなされてきたかを探り、検証し、今後の日本の宣教協力にどう生かしていくかを深く考察しました。先に出来ていた関係作りの働きから学ぶことは多く、有意義な時となりました。

昨年は神戸で「第6回伝道会議」が持たれました。講演・コイノニア・プロジェクト・分科会などを通して、同じ関心をもつ人々が出会い、祈り合い、多くの「結び目」、ネットワークが生まれました。各教団・教派の代表者が集まり、今後の教団・教派を越えた協力関係(ネットワーク)作りの準備も始まりました。神戸の実行委員会もアナログアなどを通して、今後のさらなるネットワーク作りを考えられておられます。

日本と世界の宣教のため、様々な働き・人・教会・団体の結び目を積極的に作り、生かしていく。これが、今後JEAが果たすべき働きだと思われています。また2017年は9月25日~26日に神戸で宣教フォーラムが予定されています。福音を伝える為に、共に労する私たちでありたいと願います。



【JMRレポート】

今回のJMRレポートは、2016年9月27～30日に神戸において開催された「第6回日本伝道会議」の概要及び10月にTCU大学院生を対象に行われた「教会教職特別セミナー」の概要を掲載致します。

また、他宗教に関する情報を、今回も『中外日報』のオンライン情報から、一部抜粋して転載させていただきます。

【第6回日本伝道会議開催される】

日本全体の宣教課題を中長期で確認し、宣教協力を推進する第6回日本伝道会議（JCE6）が、2016年9月27日から30日まで、神戸コンベンションセンターで開催されました。

海外ゲストを含め、全国の多様な教会、団体から2千人を超える人が参加。テーマは「再生へのRe-Vision～福音・世界・可能性～」。主講師には、第3回ローザンヌ世界宣教会議で「ケープタウン決意表明」の主筆を務めた、世界的な旧約学者クリストファー・J・H・ライト師が立ち、大会テーマに沿って4回のメッセージを語られました。

第6回日本伝道会議の内容は、7年後（次回は名古屋）の次会議までの指針として、『JCE6からJCE7へ向かうガイドブック』としてまとめられ、3月に発行される予定です。

以下に、開催プログラムとJCE6プロジェクトの一覧を示します。その他、36の分科会において多様な発表が行われました。なお、第6回日本伝道会議に向けて出版された『データブック 日本宣教のこれからが見えてくるーキリスト教の30年後を読むー』に一部誤りがありました。お詫びして正誤表を掲載致します。

I. 開催プログラム

【プログラム】					
		9/27 (火)	28 (水)	29 (木)	30 (金)
神戸 コン ベン シ ョ ン セ ン タ ー	9:00-	 <p>JCE6 6TH JAPAN CONGRESS ON EVANGELISM</p>	さんび・証し	さんび・証し	さんび・証し
	9:15-		講演：主講師《福音》 コイノニア	講演：主講師《世界》 コイノニア	講演：主講師《可能性》 コイノニア
	11:15-		プロジェクト発表	プロジェクト発表	クロージング 説教・JCE7引継ぎ・宣言 ・祈りの時
	12:30-		世代別交わり (昼食：弁当)	地域別交わり (昼食：弁当)	<p>*9/30夜～10/1 「在外日本語宣教 従事者の集い」</p>
	14:00- 15:00-		分科会① 分科会②	プロジェクトワークショップ	
15:00-	オープニング 講演：主講師 《再生へのRe-VISION》 コイノニア (夕食：弁当)	夕食：各自 ・教団、地域指導者	夕食：各自 ・同言語グループ	<p>*10/1 青年大会</p>	
19:00-	他 会 場	《一般公開集会》 ①青年宣教の集い ②世界宣教の夕べ ③神戸スペシャル	《一般公開集会》 ①青年宣教の集い ②Cライト氏講演会 ③神戸スペシャル		

2. プロジェクト一覧

JCE6	分野	プロジェクト(*JEA専門委員会)	リーダー、メンバー (*2023年JCE7枠)	ファシリテーター	JEA専門委員会
福音	福音	聖書信仰の成熟を求めて*	関野祐二、鞭木由行、山口陽一、斎藤善樹、能城一郎、Dシェーファー、	佐々木望	神学委員会
世界	多元化社会	日本社会と宣教	西岡義行、井上貴詞、渡辺聡、犬塚契、横山聖司	中谷美津雄	社会委員会
	国家	教会と国家*	柴田智悦、渡部敬直、星出卓也、須田毅、上中栄		
	環境	持続可能な社会の構築	住田裕、吉永真、小川真、永沼猛志、*立石翼	大井満	援助協力委員会
	災害	災害対応を通して仕える教会*	*松本順、*岩上敬人、*村上正道、郷津裕		
	家族と高齢化	ファミリーミニストリー*	梅田登志枝、阿部恵子、藤田真木子、葛田由理、丸山園子、三橋香代子、	金本悟	女性委員会
	グローバリゼーション	ディアスポラ宣教協力	*内村伸之、鎌田泰行、岡田千尋	中西雅裕	宣教委員会
可能性	ビジネス	ビジネス宣教協力の次世代構想	青木勝、市村和夫、柳沢美登里、青木記代美、中尾敬一		
	開拓伝道	教会開拓、教会増殖	*播義也、大田裕作、永井信義、Jメイン、嵐時雄		
	地方伝道	痛みを担い合う教会	*若井和生、木田恵嗣、*松田牧人、阿部信夫、根田祥一		
	青年	青年宣教*	西村敬憲、*川口竜太郎、*大嶋重徳、*早坂恭、飯田岳、田中裕明、薦田聡毅		
	子ども	子ども	杉本玲子、*宇賀飛翔、*古波津真琴、鈴木悟		
総合	日本宣教170▶200		山口陽一、中西雅裕、神谷典孝、福井誠、柴田初男、松崎ひかり、趙南洙、植木英次、下道定身、和田治、永井敏夫、根田祥一	品川謙一	JEA理事会
	宣教協力とそのインフラ作り		佐々木望、大井満、田中進、川原崎晃、中西雅裕	中台孝雄	
	教会の誠実さへの変革		*飯田岳、岩田三枝子、里村佳子、*大庭貴宣、鎌田愛子	金本悟	

◎『データブック 日本宣教のこれからが見えてくる—キリスト教の30年後を読む—』正誤表

頁	項目	誤	正
26頁	図14 日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団(2014年) 教会員数/礼拝者数の最頻値	60.0/15.0	12.0/7.0
27頁	表6 各教団・教派別教勢(1999年度-2014年度) 512 日本イエス・キリスト教団 1999年 教会数/教会員数/礼拝者数	146/20,356/5,813	132/12,908/5,672
27頁	表6 各教団・教派別教勢(1999年度-2014年度) 512 日本イエス・キリスト教団 増減 教会数/教会員数/礼拝者数	-15/-7,620/-508	-1/-172/-367
123頁	図70 国籍・地方別在留外国人数(法務省2015年)	国籍在留外国人数(2015年)	国籍別在留外国人数(2015年)
175頁	Q3. (「教会に行ったことがない」と答えた人に対し) 教会への関心はありますか?		
197頁	表58 日本福音主義神学校協議会に所属する神学校14行目	キリスト聖書学校	キリスト聖書神学校
238頁	編著者【協力者】	—	青木 勝を追加

◆「教会教職特別セミナー」◆

1. 日 時：2016年10月24日（月）13:00～15:30
2. 場 所：東京基督教大学国際宣教センターチャペル
3. テーマ：「家の教会」（新約聖書が教える教会・信徒による教会形成）
4. 講 師：趙 南洙師（日本同盟基督教団招待キリスト教会牧師）

◇ 内 容：

【序論：家の教会】

I 伝統的な教会の限界

1. 伝統的な教会の特徴と課題

- (1) すべての活動が主に教会の建物の中でのみ行われる。
- (2) 礼拝を献げることだけを信仰生活の目標と考える。
- (3) 牧会者による管理と少数の人が主導するプログラムによって教会の働きがなされる。

2. 伝統的な教会の問題点

- (1) 礼拝中心なので真の交わり（コイノニア）が難しい。
- (2) 役員中心の働きなので、全信徒がキリストの枝[部分]となるのは難しい。
- (3) 未信者は教会に対して無関心なので、伝道が難しい。

3. 新約の教会は「家の教会」であった。（ローマ16：3～5、コロサイ4：15、ピレモン1：2）

II 家の教会 四本柱（家の教会の土台）

1. 聖書的な教会の存在目的（マタイ28：18～20）

- (1) 教会のミッションは、人々を主の弟子とすることである。
- (2) 方法は、「出て行って、洗礼を授け、教える」ことである。
- (3) 魂の救いと、弟子づくりが教会の究極の目的である。

2. 聖書的な弟子訓練の方法（マルコ3：13～15）

- (1) 知識の伝達より能力の養成である。
- (2) 教室の中での教育より、現場の実習である。
- (3) 言葉で教えるより、行動で示す。

3. 聖書的な働きの分担（エペソ4：11～12）

- (1) 牧師の働きは、信徒を整えることである。働きができるように訓練し、適材適所に任命する。
- (2) 信徒の働きは、奉仕の働きをして教会を建て上げることである。
- (3) 牧会者の働きは、(1)以外に、祈りとみことばの奉仕とリーダーシップを発揮することである。

4. 聖書的なリーダーシップ（マルコ10：42～45）

- (1) 人生の目的は仕えることにある。
- (2) 真のリーダーシップは、仕えることから生まれる。
- (3) しもべになるというのは、共同体の必要がリーダー自身の必要より優先することを意味する。

III 家の教会 三つの軸

1. 正しい回心と霊的成長は、その人格（知・情・意）が満たされる時に可能となる。

2. 知・情・意が不調和になった事例

- (1) 学生伝道団体：知的要素に偏っている面がある。
- (2) リバイバル集会：情的要素に偏っている面がある。
- (3) キリスト教福祉団体：意志的要素（行動重視）に偏っている面がある。

3. 家の教会はこの三つの要素をバランス良く満たしている。

- (1) 牧場の集い：キリスト教への抵抗とクリスチャンへの誤解を無くす。（情）
- (2) 道シリーズの学び：福音に対する具体的な情報を提供する。（知）
- (3) 牧場共同礼拝：信仰決心を助ける。（意）

IV. House Church Ministries International が追究する「家の教会」の定義

【定義】「信徒がリーダーになり、家では6-12人が毎週一度以上集まり、教会の本質的な機能（礼拝、教育、交わり、伝道と宣教）を担う共同体」

V. 家の教会のミッション（原則）

1. 新約時代の教会の回復を目指す。なるべく新約聖書に近い組織、活動（使徒2：42）、働きの方法（使徒2：46-47）、リーダーシップスタイル（マタイ20：26-27）を形成する。
2. 教会成長より魂の救いを優先する。神は、全ての人が救われるのを望んでおられると信じるからである（Iテモテ2：4）。
3. 未信者を伝道して主の弟子にすることを教会の存在目的とする。これは、主が教会を建てられた目的であると信じるからである（マタイ28：19-20）。
4. 知識の伝達より能力の養成、教室の教育より現場の実習、言葉で教えるより行動で示す方法を弟子訓練の方法とする。これがイエスキリストの方法だと信じるからである（マルコ3：14-15）。
5. 牧会者と信徒をそれぞれの召しに歩ませる。牧会者は信徒を整える（エペソ4：11-12）、祈りとみことばの務め（使徒6：2-4）、リーダーシップの発揮に集中する（使徒20：28）。信徒は奉仕の働きと教会を建て上げる働きをする（エペソ4：12）。
6. セルグループや小グループではなく、新約時代の教会の共同体を追及する。
家の教会の基礎共同体である牧場が、新約時代の教会の共同体となるために次の事項を守る。

- (1) 毎週集まる（使徒20：7）。
- (2) 男女共に集まる（ローマ16：3-5）。
- (3) 信徒と未信者共に集まる（Iコリント14：23-25）

VI. 家の教会と他の小グループとの異なる点

VII. 家の教会システムへの移行及び成功の原則

【第1段階：牧会者自身が明確な絵を描く】

I. 牧会者はリーダーである。

1. リーダーに要求される三つの働き

- ①方向（direction）設定、②動機（motivation）付け、③方法（competency）の提供
 - ・いろいろな方法を知っていても、方向設定と動機付けがないなら、何の役にも立たない。
 - ・方向がはっきりすれば動機付けられ、動機付けられれば方法が見えてくる。

II. 牧会者の確信が家の教会を成功させる。

III. 牧師と信徒との信頼関係が形成されているなら、家の教会は成功する。

【第2段階：危機意識を吹き込む】

I. 現状に対して不満を感じていないなら、家の教会システムによる開拓や同システムへ移行することは難しい。

II. 教会の現状を直視させる。

III. 聖書的な教会の姿を提示する。

【第3段階：信徒リーダーを同労者とする】

【第4段階：教会の方向設定を具体化させる】

【第5段階：一般の信徒を説得する】

【第6段階：家の教会のスタートを準備する】

【第7段階：家の教会への船出】

【第8段階：家の教会を円滑に実行する】

【第9段階：手綱を緩めない】

【第10段階：家の教会の文化を定着させる】

【文責：柴田 初男】

他宗教に関する新聞記事から 【2016年4月～2016年12月】

人々の心に教えは届いたか 仏教各派の「スローガン」は今

2016年6月15日付中外日報（深層ワイド）

信仰運動の理念を端的に表現

伝統仏教各宗派は、それぞれの教えを端的に表現し、「いのちの尊さ」や「他人とのつながりの大切さ」を訴える「スローガン」の下、教化活動や宗門運動を展開している。多くの教団がスローガンを掲げ始めた1960年代から今に至るまで、そこには一貫して変わらない願いが流れているが、その願いが宗派内外に思うように浸透していない状況もある。（杲恵順・青山智耶）

京都駅前真宗大谷派真宗本廟（東本願寺・京都市下京区）には、毎年5月から6月にかけて約2千人の修学旅行生が訪れる。駅から続く地下道から同寺に面した「烏丸七条交差点」に出た生徒らの多くは、この言葉の前で足を止める。

「今、いのちがあなたを生きている」一。

同派が2011年の宗祖親鸞聖人750回御遠忌を機に掲げたスローガンだ。交差点前の同寺外堀にこのスローガンの巨大な看板が設置されている。その大きさもさることながら「いのちがあなたを生きている」の文言が目をつくよう、友人と「文法がおかしくない？」などと話しながら境内へと入っていく。

スローガンは宗派の「御遠忌専門委員会―御遠忌テーマに関する委員会」で、1年間の協議を経て05年に決定した。委員会でも「日本語としてどうか」との意見があったが、最終的には「テーマが様々な議論を呼び、新しい表現や運動が起こされていくこと」を願って定められた。

その背景には、当時の時代状況が大きく反映されている。日本の年間自殺者は3万人を超え、海外ではアメリカ同時多発テロに端を発するアフガニスタン戦争をはじめ、民族・宗教間の対立が後を絶たず、多くの尊い命が失われていた。委員会は、そこには「近代的人間観に基づいた“いのちの私有化”の問題がある」と捉えたのだ。

「いのちが誰のものか。決してわたしのものではない。その自己執着の闇を破る呼び声こそが念仏ではないか」。スローガンには「はかりしれないいのちを持つ無量寿仏である阿彌陀如来の呼び掛け」が表されている。

熊谷宗恵宗務総長（当時）は「浄土を根拠とするいのちを回復せんとされた親鸞聖人のお姿に出会うことを通して、あなたを、そして私を貫くいのちの事実の深さと広さを確かめてほしい」とスローガンに込めた願いを語っている。

宗派には、看板を見た修学旅行生や観光客から「意味を教えてください」との問い合わせが多く寄せられているという。総務部広報は「その都度、テーマに込めた願いを丁寧に伝えているので、一般の人にも仏教の教えに触れてもらういい機会となっているのでは」と話す。

キーワード「いのち」「ともに」「生きる」

創価学会などの新宗教が台頭してきた1960年代。その勢いに対抗するべく展開した信仰運動の中で、伝統仏教各宗派はスローガンを掲げ始める。経営の理念を一言で分かりやすく表した「キャッチコピー」を活用している企業も多いが、各宗派はスローガンを通じて檀信徒らに何を伝えようとしているのか。

共通する願い 仏の教え一言で発信

各教団は仏教の教えに基づき、様々な言葉でメッセージを発信しているが（一覧表参照）、それぞれのスローガンには共通する願いが込められている。それは①仏（の教え）と出会うことで②先祖から脈々とつながってきた無数のいのちと③今あるつながり（ご縁）の世界に気づき、その感謝の中で④皆が互いを敬い合いながら⑤自分ができる範囲で教えに基づいた活動を実践していく大切さ―である。

①の「仏の（教え）との出会い」を説くのは、真言宗智山派と豊山派。両教団とも教化・布教テーマの下、仏や弘法大師の教えと出会うための修行体験や講演会などを開いている。智山派の「仏と出会えた喜びを生きる力とし、多くの人と共に歩んでほしい」との願いは、③④⑤ともつながっている。

②と③の「いのちのつながりへの気づきと感謝」は、臨濟宗妙心寺派の「おかげさま」のスローガンが盛り込まれている。宗派 HP ではその趣旨について「私たちは突然この世に生まれた訳ではない。両親をたどっていくと、無数の生命に気づかされる」「あらゆるものに至るまで多くの支えを受けており、自分一人で生きているのではなく、生かされている」とし、「そのことに気づいた時に出てくる言葉がおかげさま」と説明している。

浄土宗も「今の世の中だけでなく過去から未来へとつながっている“いのち”との共生も大切に」と、縦と横のいのちのつながりを呼び掛ける。

「いのち」は、日蓮宗、高野山真言宗、真宗大谷派がスローガンで用いている。高野山真言宗は、生物学的な生命だけでなく、大乘仏教の「草木国土悉皆成仏」の教えの下、「人間だけでなく、あらゆるもの（物・者）すべてが成仏できる仏性を具えている」とし、幅広い「いのち観」を提唱。

浄土真宗本願寺派は「東日本大震災以降、『絆』が時代を象徴する言葉となったが、その大切さを認めつつも、仏教教団としてさらに一歩踏み込んだつながり『ご縁』を提示したい」とスローガンを定めた。「阿弥陀如来の救いに出会えたこと」を「縁」と表し、「仏との縁が生きていく支えとなる」とする。

同じく大震災以降に定められた曹洞宗の内局スローガンは、同じ時代を生きる檀信徒、僧侶・寺族のつながりの中で「他のすべての人々の幸せを自分の喜びにし、すべての生きとし生けるものの安らぎを自分の幸せとして生きていく『菩薩の誓願』を確かな価値観として共有することが大切だ」と、④の「互いの敬い合い」を訴えている。

そして⑤の「教えの実践」の理念を最も強く表すのは天台宗の「一隅を照らす」だ。「一隅」とは「今あなたがいる場所」の意味。約50年間にわたって「一人一人がそれぞれの持ち場でベストを尽くして、その場所を照らしてほしい」と呼び掛け続けている。

源は60年代 新宗教台頭に危機感

仏教各宗派はいつ頃からスローガンを使用するようになったのか。多くは1960年代

に、檀（門）信徒の信仰を深め、寺院を活性化させるための「信仰運動」を機に掲げ始めた。

大谷派の「真宗同明会運動」（62年～）、本願寺派の「門信徒会運動」（62年～）、天台宗の「一隅を照らす運動」（69年～）、などが60年代に始まったが、その背景には、急速に信者を増やし躍進する新宗教系団体への危機感があつた。

本願寺派は「宗祖親鸞聖人の700回大遠忌」（61年）を機に運動を開始。大谷光照門主（当時）が教団の形骸化に危機感を示したことを受け、僧侶・門信徒の「全員聞法・全員伝道」を目指して「門信徒会運動」を展開。都市部への人口流入や核家族化、新宗教の教線拡大という危機的状況から「あなたのお寺を強くせよ」をスローガンに掲げた。

その後、あらゆる差別の撤廃を目指した「同朋運動」と「門信徒会運動」が一本化され「基幹運動」が始まる。「念仏の声を世界に子や孫に」をスローガンとしたが、その願いである「いのちの尊さにめざめる一人ひとりが、それぞれのちがいを尊重し、ともにかがやくことのできる社会の実現」は、現在の「御同朋の社会をめざす運動」（実践運動）にまで一貫して引き継がれている。

“相互供養”の間柄で教化を進めていこうと、69年に「つくしあい運動」を提唱した智山派も、当時のテーマの一つである「生きる力」を今でも用いている。また日蓮宗はこれまで、「合掌で光を」「あなたを拝みます」「いのち、不思議」など、「合掌」「いのち」をキーワードとしたスローガンを使っており、どの教団も社会状況は変化しても、何を伝えていくかという布教方針の根本は変わらないことが見て取れる。



伝統仏教教団各派のスローガン

宗派	スローガン	意味・教化施策
天台宗	一隅を照らす（1969年～） 「一隅を照らす運動」と共に展開	他人を思いやれる心、自利利他の自分に目覚め、人やもの、自然に感謝する心の大切さを訴える。全国に教区本部や支部を組織。各地での「一隅を照らす運動推進大会」をはじめ、社会福祉活動や募金活動などの地球救済事業などを実践する
高野山真言宗	生かせいのち（1975年～） 弘法大師入定1150年遠忌のテーマ	弘法大師の「即身成仏」「濟世利人」「密厳国土建設」の教えを端的に表現する。設定当時はこの統一テーマの下、信仰運動を推進。1986年に始まった「御宝号念誦運動」の基本理念になり、また2015年の「高野山開創1200年記念大法会」でも用いられるなど、宗団の活動理念として今に引き継ぐ
真言宗智山派	①生きる力～安らかなる心をともに（2013年～）4年毎の教化目標 ②仏さまと出会う（15年～）2年毎の教化年次テーマ	私たちの心を込めた祈りと、仏の「皆を救う」という願いが一つとなって、仏の無限のはたらきの中に生きることを感じる。その喜びを生きる力とし、「安らかなる心で多くの人とともに歩んでいきたい」との目標を持ち、心の中に息づく仏と出会うため、写経・写仏、御詠歌、巡礼・遍路・団参、阿字観、結縁灌頂などの修行体験を推進する
真言宗豊山派	南無大師遍照金剛～お大師さまととも～（2014年～）中長期の教化布教テーマ	御宝号を唱える運動を推進し、弘法大師信仰を弘める。管長の御親化巡教、宗派及び支所主催の結縁灌頂を推進、本山参りの奨励・推進、「弘法大師の願い」をテーマとした講演会など
浄土宗	法然共生（2007年～） 宗祖法然上人800年大遠忌メッセージ・シンボル	21世紀における指標である劈頭宣言の精神と、大遠忌記念事業の理念である「尋源培根」を、「法然上人共生世界」と表し、それを略した。ロゴマークを開発し、各種封筒や名刺などに印刷。グッズ販売も
浄土真宗本願寺派	結ぶ絆から、広がるご縁へ（2015年～） 御同朋の社会をめざす運動（実践運動）スローガン	苦悩のある姿そのままに抱きとめられていくのが阿弥陀如来の救い。そのよろこびを共有し、お互いを認め合える御同朋の確かなつながりを、その救いの姿の中に確かめながら、無力な我が身であることを慨嘆しつつも、無縁の大悲を行動原理として活動していく実践運動の理念を示す。宗門総合計画のもと推進する事業とリンク。「子ども・若者ご縁づくり推進室」の取り組みや、「ピハール活動」「過疎対策」などがある
真宗大谷派	今、いのちがあなたを生きている（2005年～） 宗祖親鸞聖人750回御遠忌テーマ	「今」という言葉は、自覚を促す呼び掛けの言葉。過去の思い出と、経験に捉われがちな私たちに、「今を今として受け止めて生きよ」と自覚を促す念仏の声。また、近代的な人間観に基づいたいのちの私有化の問題に対して、「いのちは決して私のものではない」と、自己執着の闇を破る念仏の呼び掛けを「いのちがあなたを生きている」に表現
臨濟宗妙心寺派	おかげさま（1973年～） 花園会の「おかげさま運動」と共に展開	宗綱第3条にある開山・無相大師の遺訓「請務其本（請う、其の本を務めよ）」と、開基・花園法皇の聖旨「報恩謝徳」を言い換えた。各寺院の看板や毎年副テーマを添えて制作するポスター、輪袈裟につけるバッジなどがあり、知足（足るを知る）に基づいて、生活点検6項目を定め、節電、節水、省エネなどに心がける
曹洞宗	ともに願い ともに寄り添い ともに歩む（2014年～）内局スローガン	宗務総長が交代時に発表。宗派の教義「四摂法」を表し、一般的な言葉を用いながらも、普回向に代表される宗教の持つ本質的な願いが反映されている。背景には、東日本大震災後、復興が進まない中で「檀信徒や被災寺院と共に歩んでいく」という宗派の方針がある
日蓮宗	いのちに合掌（2007年～） 立正安国・お題目結縁運動スローガン	『法華経』に説かれる但行礼拜の精神に基づき、仏性を備えている互いを敬い合い、いのちの尊さに気づくことを目指し宗門運動の目標である「敬いの心で安穩な社会づくり、人づくり」を推進する。合掌の手の形をモチーフにしたロゴマークを作成。発行物などに使い、「合掌礼」の普及を図る。また、人に会った時の挨拶で合掌するよう呼びかけるなど、身近なところから合掌し合えるよう僧侶向けの布教冊子で指導している

活用法に工夫 浸透いま一つの声も

各教団は、スローガンを職員の名刺や封きの筒に印刷し、宗派内外への周知を図っている。日蓮宗はスローガン「いのちに合掌」の下、2021年の日蓮聖人降誕800年に向け、合掌する人を増やすことを目的とする宗門運動「立正安国・お題目結縁運動」を推進しているが、14年度に宗内で実施したアンケート調査では、87%の寺院が「檀信徒に宗門運動が浸透していない」と回答した。

アンケートの結果を受けて、運動の認知度の向上を図るため、少しでも関心を持ってもらおうと教箋や冊子ではなく、巻物の形をした説明書を作製したが、宗内では賛否が分かれた。主な否定的意見は「こんなものにコストをかける必要はない」と手厳しい。またスローガンと共に作成したロゴマークを印刷したコースターも作ったが、これにも「宗祖のイメージを込めたロゴマークを、コップの下に敷くのはけしからん」との苦情が届いた。

太田順祥伝道企画課長は「これまでも宗報で宗門運動やロゴマークを知らせてきたが、反応はなかった。反応があったことに意味がある」と、これらの意見を前向きに捉えつつ、「新しいことをすれば失敗が出てくるのは当然のこと。その失敗の原因を分析して今後の財産としたい」と話している。

佛光寺モデル 八行標語が好評 広く浸透、書籍化

宗派が掲げるスローガンなど教学周知の取り組みに新しい角度から迫っているのが真宗佛光寺派本山佛光寺（京都市下京区）だ。あえて「仏教用語」を多用しない八行標語を同寺南側の門前の塀に毎月掲示している。昨年、その内容がSNSで話題となり書籍化もされた。早くも増版を重ねており、仏教教団の考える標語が広く一般に浸透した好例ともいえる。

同派の吉田譲宗務部長は「仏の目で私の姿を見つめた時、自分や社会がどう映るのかということ念頭にスローガンを作っている。一般の人にも伝わりやすいよう、専門用語を使わず、仏教的な世界観を表せるよう配慮している」と話す。

昨年、若者を中心に話題となった標語は「ひと月待たせ／手紙の返事／メールになって／一週間／LINEになって／一時間？／待たなくなってる／せわしないね」。難解なことば

はなくとも仏教的な要素を含んでいる。

そして、書籍化に当たっても一工夫。「活字離れが進んでいるので、視覚的にも良いものを」と京都の町中や路地裏の写真と共に66編の標語を掲載することになった。

標語は、同派の機関誌『ともしび』の編集委員が交代で作成。「日常生活の中で折に触れて生み出されてくる言葉で、読んだ時にちょっと考える要素があること」を大切にしている。

吉田部長は「八行標語によって苦しみや迷いを受け入れて、いのちを精いっぱい生きる方向に日常を歩んでもらえたら」と願っている。

“分離の原則”より“信頼の欠如”

2016年4月13日付 中外日報（深層ワイド）

“政教連携”の広がり阻むカベ

宗教界と行政との連携が広がりつつある。宗教者の中には“政教分離の原則”が連携の壁になると考える人もいるが、実際には宗教法人や宗教者が地域の信頼を得られていないことが連携の障害となっている場合が少なくない。東日本大震災などを機に災害時の防災協力など様々な場面で行政から協力が求められるようになってきているが、宗教者がその期待に応じて、公益性を発信することが重要になっている。（甲田貴之）

熊本県宇城市の糸山公照・真宗大谷派光照寺副住職（39）は2015年、地域社会の悩み相談所として一般社団法人「あなたの駆け込み寺」を開設した。立ち上げの際、熊本県が活動費を補助する「地域共生くまもとづくり事業」に応募したが、行政側は“宗教”を理由に抵抗感を示した。

「あなたの駆け込み寺」は、人々の悩みを糸山副住職が聞き取り、医師、弁護士、税理士、司法書士、ケアマネジャー、葬儀アドバイザーなど専門家と解決方法を模索する。「地域のお坊さんは門徒から悩みを聞いたり、月参りなどを通じて檀家の家庭の事情をよく知っている。苦しんでいる人がいれば解決したい」補助申請の窓口の県宇城地域振興局を訪れた糸山副住職は、高齢者に対して地元主体で支援する地域包括ケアシステムにおいて、宗教者が生活支援を必要とする人の窓口になれると訴えた。担当者は連携については好意的だったが、「一般社団法人の事業として

進めてもらって構わないが、宗教活動に補助金を出すわけにはいかない。補助事業なので、宗教性を排除してほしい」と求めた。

そして、「僧侶」などの文言を事業内容の書類には入れず、布教・伝道を目的としないことを明記することで、補助を受けられることになった。

糸山副住職は「役場の中には宗教という言葉に対して、オウム真理教やカルトを想定する人もいる。信頼関係をつくっていく必要性を実感した」と振り返る。

同会では現在、悩み相談の他、終活セミナーを開催しており、活動の様子を宇城市の広報紙に掲載してもらうなど、行政との関係を深める努力を続けている。

糸山副住職は「宗教者が社会貢献活動を積み重ねることで、行政からの信頼を獲得していく。最終的には地域包括ケアシステムにお坊さんや牧師さんが入り、住民の支援ができることを目指していく」と語った。

布教や伝道活動を持ち込まない 宗教者と行政 連携の可能性は

宗教者と行政の連携の可能性は、福祉、観光、文化財の保護・活用など様々な分野に広がっている。しかし、宗教者が行政に警戒心を抱かれないためには、布教や伝道などを持ち込まないなど、適切な対応が必要だ。

福祉 全国初自殺防止に臨床宗教師活用 傾聴は宗教・宗派を問わず

京都府は龍谷大と提携し、自殺防止に宗教者を活用する取り組みを今年から始めた。府内の公民館などで臨時のカフェ「京風 Cafe de Monk きょうのモンク」を開き、宗教者による傾聴活動を通じて、死にたいと考える希死念慮者の心のケアを行う。

3月4日、乙訓地域で開かれた「きょうのモンク」では、臨床宗教師10人が自死者の遺族ら6人と面談した。だが7日に中丹地域で開催した際は参加者はなかった。広報など課題も残るが、府健康福祉部福祉・援護課の山口健司副課長（46）は「継続的に行うことで実績を積み、周知につながれば」と話す。来年度には130万円の予算が計上されることが決まっている。

「きょうのモンク」は、府がNPO「京都自死・自殺相談センター（Sotto）」に運営を委託し、龍谷大が臨床宗教師を派遣する。Sottoの活動など相談の現場では「あの人は成仏できているのだろうか」など宗教的な悩みを抱

える遺族がおり、府の担当者は、東日本大震災の復興支援で東北の仮設住宅を会場に金田諦應・曹洞宗通大寺住職が開いている移動傾聴喫茶「カフェ・デ・モンク」を参考にして、「きょうのモンク」を立ち上げた。

行政機関が臨床宗教師を活用するのは全国初のケース。府は政教分離の原則に抵触しないと判断している。重要な要素となったのは傾聴が宗教・宗派を問わない活動で、布教・伝道を行わないことだ。

臨床宗教師は超宗教・超宗派の協力を掲げ、倫理綱領には「ケア対象者の信念、信仰、価値観の尊重」や、「布教・伝道を目的として活動してはならない」と定められている。

山口副課長は、宗教者の側が公共性を意識した規範を設けていたことが行政からの信頼を獲得する大きな要因となったと言う。

政教分離の原則が障害ではない

大阪大大学院・稲場圭信教授

東日本大震災後、自治体と宗教施設との災害協定に関して調査を行った稲場圭信・大阪大大学院教授に宗教と行政の連携の可能性について聞いた。

◇

調査では約300の自治体が2千を超える宗教施設と災害時における協定を締結、あるいは協力関係にあることが分かった。さらに広がりを見せている。日常的な高齢者の見守りでも、包括ケアシステムへの参加など連携の可能性は高い。

東京都をはじめ、都市部は、2025年、団塊の世代が75歳以上になり、高齢者が急増することが予想される。国の社会保障では対応しきれず、人手も足りなくなり、臨床宗教師のニーズがじわじわと高まっていくだろう。

臨床宗教師は超宗教の活動で、布教しないとの倫理規定があることで一般の人々に安心感を与えられる。臨床宗教師ではない一宗教者では、警戒感を持たれやすい。

一つの寺、一つの神社と行政が連携している事例を見ると、宗教者が学校の先生やPTAなど地域と積極的に関わり、信頼を獲得している。役場の人たちは政教分離の観点から宗教者との連携に躊躇しているのではなく、顔の見える関係にない人と協力することに不安を抱いている。

檀家や氏子との強固な関係が薄れている現代、住職や宮司が地域社会の中で、ケアにも関わっていく時代になるだろう。行政と連携する寺社には地元の住民も寺に来やすくなり、

活性化も促される。社会的に宗教を受け入れる土壌が整い、心の悩みだとか、相談を通じて、長い目で見た布教になる。行政との連携が「布教しない新たな布教」につながる。

【文責：柴田 初男】

教団・教派、宣教団体の 機関紙・ニュースから

カトリック中央協議会

◎会報<2016年12月号(541号)>

新福音化委員会

◇201年度第3回会議

【審】2017年記念の集いについて

第1福音宣教推進全国会議(NICE-1)開催から30年という節目である2017年に、日本の福音宣教における課題や体験を分かち合う集いを開催する件について、具体的にテーマや開催日、会場などを検討した。

諸宗教部門

◇シンポジウム「いつくしみとあわれみ(慈悲)

—諸宗教における日本人の心—

2011年より「自死」をテーマに東京、福岡、大阪の三都市にてシンポジウムを開催し、2014年には「高齢化社会を豊かに生きること」について、昨年には「平和を求める宗教者の使命」をテーマに開催し、諸宗教との親交を深めてきた。今年は「いつくしみの特別聖年」にちなみ、「いつくしみ」や「あわれみ」は「慈悲」という言葉によって日本人の心に広く浸透していると考え、宗教を越えた霊性について共に分かち合うためのシンポジウムを開催した。

パネリストは三橋 健師(神道・國學院大學客員教授)、佐竹 通師(仏教・真宗大谷派専勝寺前住職)、中川博道師(カトリック・カルメル修道会)の三人で、第一部では各パネリストから約25分の発題を、第二部では会場からの質問を受け、質疑応答と対談を行った。

第一部で三橋師は、神道におけるいつくしみとは「神々が私たちを御大切にすること」という意味の「斎(いつ)くしみ」という神道用語として理解されていると紹介し、これは、親が子を大切にすることと同じでありながら、神々のいつくしみは無限であると解説した。また、キリスト教が日本に伝来した当時、日本のキリスト教徒たちが「キリストの愛」を「神の御大切」と訳したことに触れ、神道とキリスト教の根底に流れるいつくしみの心は同じであると述べた。

日本宣教学会ニュース

◇2017年度全国研究会・総会の開催

- ・日時：2017年7月1日(土)
- ・場所：岐部ホール(東京・四谷)
- ・テーマ：今日の宣教を問う
—宗教改革500周年を機に—
- ・講演：
 - ① エラスムスにおける改革と寛容：木ノ脇悦郎(元福岡女学院大学)
 - ② ルター—神の言葉を隣人へ：安田真由子(The Lutheran School of Theology at Chicago)
 - ③ カトリック教会から見た宗教改革の意義：角田佑一(Santa Clara University, CA)
 - ④ イエズス会が見出した日本人の『理性』—ヨーロッパ思想史との相関関係を考慮しつつ：折井善果(慶応義塾大学)

- ・連絡先：事務局
〒270-1347
千葉県印西市内野三丁目301-5
学校法人 東京キリスト教学園内
TEL: 0476-31-5522 FAX: 0476-31-5521
E-mail: jmsoffice2005@gmail.com



次に佐竹師は、仏教におけるいつくしみは「慈悲」であり、「慈」は“深い友情”を、「悲」は“引き裂かれる心、黙ってみてられない心”を意味し、どちらも仏の心であると説明した。また、この慈悲とは「人と人との命をつなぐ心」であり、その具体的な行為であると解説した。さらに「闇」とは閉じた門によって音が遮られた世界を指し、この「音」は本来「こえ（声）」と読むことから、「声が閉ざされた世界＝闇」であり、同時に人間がどうにもならない時、その人に呼びかけその命に届くのも「声」だと述べ、声を掛け合うことの大切さを訴えた。

最後に中川師は、いつくしみやあわれみを表す“Misericordiae”は、「惨めな、どうしようもない、病んでいる」という“miser”と「心、感情」という“cor”の合成語であり、「惨めでどうしようもない人間に対し、神はどこまでも心を寄せてくれる」という意味であると解説した。そして、この特別聖年は「こうした人間に心を寄せてくれる方にもう一度出会い直そう」という教皇フランシスコの意図があると述べ、現代の人類が直面している様々な危機に際し、神のいつくしみを基盤とした価値観が必要であると語った。

これを受けて行われた第二部では、会場からの多くの問いかけに対し、「いつくしみ」や「慈悲」という共通の心を踏まえながら、それぞれの立場から回答した。

日本基督教団

◎「教団新報 NO. 4854」(2017.1.28)

◇新春メッセージ「伝道力の命と力の回復」

石橋秀雄（第40教団総会議長・越谷教会牧師）

危機の共有、伝道力の回復

日本基督教団は信徒減少による教会消滅の危機、財政破綻の危機を迎えようとしている。第40回教団総会においてはこの危機を共有し、全教団的取り組みが急務であることを確認する総会となった。

この危機にあって教団の第一の課題は伝道力の回復である。すなわち伝道力の命と力の回復だ。主イエスの圧倒的な伝道命令に忠実であることこそ「教団の伝道力の命と力の回復」をもたらすと考える(マタイ28:16-17)。

主イエスの指示に従って山に登った弟子は11人だった。イスカリオテのユダが欠けてい

る。この弟子たちが山に登り復活の主に出会った。すなわち山で、神に出会って震え上がり、主の前にひれ伏し拝む弟子たちの姿が記されている。

この弟子集団はユダ的破れを内にもち、疑う者もいる弟子集団だ。この弟子集団を復活の主が圧倒し、主の伝道命令が、響き渡る。

(マタイ28:19-20)

うちにユダ的破れを持ち、疑う者もいる弟子たちが、主の伝道命令に圧倒される。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがと共にいる」との主の言葉に励まされ、迫害を恐れず、いのちを捧げて伝道する弟子たちに変えられていく姿が示されている。

驚くべき伝道力の発揮（中略）

主の命と力を受ける

わたしたちの教会も、最初に伝道命令を聞いた11名の弟子たちのように、内にユダ的破れを持ち、疑う者もいる群れである。

しかし、わたしたちは、復活の主に、神に出会う。十字架の贖いの福音に救われたわたしたちに圧倒的な主の伝道命令の言葉が、響きわたる。(マタイ28:19-20)

神の民が増えることは教会の大きな喜びだ。何よりも「大きな喜びが天にある」(ルカ15:7)と主が語られている。

伝道は主の業である。聖霊なる神が伝道の道を切り開いてくださる。この主の伝道命令に忠実に従う時、主の命と力を受けることができる。

主イエスは「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と、主の伝道命令に従う者を励まし、伝道力の命と力を与え続けてくださるのだ。

日本聖公会

◎日本聖公会 管区事務所だより

(2017年1月25日 第318号)

◇宣教の5T-新しい年の出発に当たって-

管区事務所総主事 司祭 エッサイ矢萩新一

「暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた(マタイ4:16-17、顕現後第3主日)。

2017年、新しい1年が始まりました。本年もどうぞよろしくお願いいたします。先日、各教区の青年担当者が行なわれ、昨年夏のCCEA（聖公会の東アジア教会協議会）主催のアジア青年大会に参加した青年たちの報告をお聞きしました。The Five Marks of Mission（宣教の5指標）を青年活動に当てはめて発表し、アジアの青年たちと宣教について共に学んだ経験から、5指標を広めたい！と、報告書を作成中とのこと。青年たちによる 宣教の5指標の解説を楽しみにしています。「①神の国のよき知らせを宣言すること=Tell（伝える）、②新しい信徒を教え、洗礼を授け、養うこと=Teach（教える）、③愛の奉仕によって人々の必要に応答すること=Tend（仕える）、④社会の不正な構造を変革し、あらゆる暴力に反対し、平和と和解を追求すること=Transform（変化させる）、⑤被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生するために努力すること=Treasure（尊ぶ）」と、5つの「T」のつく単語で表現して学んだそうです。福音を多くの人に伝えること、新たな信徒を教え養うこと、一人ひとりを大切にすることで仕えること、正義と平和を求めて自分や周りを変化させていくこと、すべてのいのちを尊ぶこと、私たちキリスト者の生き様の基本姿勢が濃縮された世界聖公会共通の信仰の基です。教会のこの働きは何番目の指標、教区のこの委員会の働きは何番目に当てはまる、管区のこの働きはと、今一度私たちの活動を整理整頓して、新しい気持ちで歩んでいきたいと思えます。今年、宗教改革から500年を迎え、更なる協働の可能性を求めて、宣教協議会や合同礼拝・集会などが各所で企画されています。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と招かれるイエスさまに、私たちは何を捨てて、従えるのでしょうか。新しい1年の歩みの上に、神さまの豊かな祝福とお導きがありますように。

日本同盟基督教団

◎「世の光 NO.792」（2016.9）

◇ 新・安息年研修制度（理事 野口富久）

このたび教職教育部は「新・安息年研修制度」を発足させました。今まで「安息年研修

制度」がありました。（中略）これをバージョンアップしたのが新制度です。

①学び研鑽を積むことによって問題への対処ができる。

米国の例ではありますが、燃え尽き症候群に陥った牧師のResearchの中で、第一番目の原因が「ミニストリーをする上で、直面する問題に対処できる訓練が成されていない」というものです。割合にして、燃え尽き症候群の牧師の90%が感じていることです。これは、燃え尽きる前にその対処法や訓練を受けていれば回避できる可能性が高いということです。②信頼できる同労者との交わり

牧師のように対人関係のスキルが必要とされている他の職業の人たち（一般の専門カウンセラー、セラピスト等）は、必ず自分自身をチェックしてくれるスーパーバイザーを持っています。そんな意味でも、信頼でき、相談できる同労者のもとを訪れ、交わることは非常に有益です。

具体的方法

教職7年目の正教師に、安息年研修に該当する4主日のうち、1主日を必須で教団内の教会で実施研修を受ける。期日は主日を挟んで4～6日間、任意で2回目まで可。残りは従来通り休養など自由に用いていただくという内容です。（以下略）

◎「世の光 NO.796」（2017.1）

◇神への緊急の祈り（伝道局長 入江喜久雄）

（前略）伝道部は、2017年も同盟未設置8県の福音化のために、新規開拓の準備を致します。九州宣教区は2016年11月の宣教区会議で、鹿児島新規開拓を「教団レベル開拓・九州宣教区協力」で行うことを決議し、教師派遣と開拓場所選定の準備が整いました。東海東・東海西宣教区は協力して、2018年に三重開拓、中国四国宣教区は2019年に徳島開拓を「宣教区レベル開拓」として計画しています。残る長崎、佐賀、島根、和歌山、秋田にも働き手が起こされるように個人祈祷で教会の礼拝と諸集会で、宣教区と教団の諸集会で結集祈祷を行ってくださいますようお願い申し上げます。

日本ホーリネス教団

◎「JHC Revival 815号」(2016.9)

◇さまざまな宣教協力(総務局主事 松島信人)

今年度の教団の施政方針(祈りとビジョン)の鍵語は、「ネットワーク作り」です。「作り」と言いますと、新しいネットワークの構築を想像する方もいらっしゃるかもしれませんが、これまでに構築してきたネットワークを、さらに深めていくことも含まれています。(中略)すでに教団として関わりを持っている交わりをいくつかご紹介いたします。

世界ホーリネス教会連盟

1967年に、基督教大韓聖潔教会、台湾聖教会、日本ホーリネス教団を中心に、アジア南太平洋地域ホーリネス教会連盟が創立されました。OMSと基督教大韓聖潔教会の協力等でホーリネス教会が世界各地にできたこともあり、2004年に世界ホーリネス教会連盟に名称が変更されました。また、1カ国で複数の教団が加盟できることになり、イエス教大韓聖潔教会が加盟しました。この他に、北米韓国、香港、インド、インドネシア、フィリピン、バングラディッシュ、ネパール、メキシコが加盟し、ケニア、カメルーン、カンボジアがオブザーバーとなっています。

総会は3年に1回開催され、2017年に日本で第21回総会が開催されます。その他にも、世界宣教大会、信徒大会、青年大会、女性教職及び牧師夫人大会、教育大会等も開催されています。

この交わりが深められていった結果、2007年に基督教大韓聖潔教会と、2014年にイエス教大韓聖潔教会と、2015年に台湾聖教会とそれぞれ宣教協約が結ばれ、日本に宣教師が派遣されることになりました。

三国交流

三国交流とは、OMS 北米ホーリネス教団、ブラジル福音ホーリネス教団、日本ホーリネス教団との交わりのことです。(以下略)

基督兄弟団との宣教協力

2000年に開催された第4回日本伝道会議の時に基督兄弟団と宣教協力が結ばれました。当初は両教団の理事会及び教団委員会との懇談会が中心だったが、それに加えて神学校関

係者、青年宣教担当者、歴史検証などの交流や学び会が行われるようになりました。

また、東京聖書学院が基督兄弟団の指定神学校になりましたので、基督兄弟団の献身者も入学し、現在4名が在学しています。

(以下略)

日本キリスト教連合会

プロテスタントだけではなく、カトリックを含めた協力によって運営されている団体です。日本国憲法が保障する信教の自由と政教分離の原則のもとに、宗教法人の適正な管理運営に寄与し、一方では「信教の自由」を守るために発言すべき時に発言するという責任を託されています。

とくに宗務行政における窓口と位置付けている公益法人「日本宗教連盟」の構成団体として、適正な法人事務の向上の上で重要な責任を負っています。今から十数年前に起こった月定献金袋に関する問題も、この連合会が窓口となって所轄庁と交渉し、現在の形になりました。

◎「JHC Revival 819号」(2017.1)

◇「新しい歩みを導かれる主」(教団委員長 中西雅裕)

(前略)今年、教団として新しい三つのことを進めていきます。

1. 昨年持たれたユースジャム2016には、500人近くの中高生・青年たちが集い祝福の時となりました。(中略)各局に分散している次世代育成のための組織を改編して一つにし、働きを進めていきます。
2. 全教職者の厚生年金保険・健康保険の加入を検討していきます。
3. 統合も視野に入れた宣教協力が具体的に進められていくために、教団教派の責任者や宣教部門の責任者を中心に、団体としての教団教派間の協力とともに、各地域での個々の教会間の協力と交わりを積極的に作っていきます。(以下略)

◎「JHC Revival 820号」(2017.2)

◇「次世代育成プロジェクト報告」

第5回公開講座報告

(沖永良部教会 羽佐田和世)

昨年「りばいばる」8月号に取り上げられた、茅ヶ崎教会で毎月行われている「ほんそん子ども食堂」代表者の早川仁美さんを講師

にお迎えして、「Action!」というテーマで公開講座を行いました。

早川さんは、茅ヶ崎教会員の大森小幸姉を含む8名からなる「地域のお茶の間研究所さろんどて」を通して、地域の居場所作りをさまざまな活動によって展開してこられました。それは高齢者や子連れの方々が集う「さいとうさんち」の活動に始まり、赤ちゃん連れの方々のための「プレママ」と赤ちゃんの日、そして人の心を聴く「傾聴講座」、さらには子どもたちの居場所「子ども食堂」を始めるに至ったとのこと。 (中略) 教会が教会らしいことをせず、場所を提供するというだけでいいのかというジレンマも出てくるでしょう。しかし私たちには発想の転換が必要なかもしれません。結果的には伝道へつながることを信じて、まずは地域の必要に耳を傾け教会を開くということです。教会の様々な掲示物、飾ってある絵、掲げられている御言葉が人々の心に伝わるがあります。主の愛を伝える可能性はあらゆることを通してできるのですから、私たちはもっと地域の声と必要にみみとお傾けていくことが大切なのではないかと思われた講演でした。

日本イエス・キリスト教団

◎「JCCJ times NO. 770」(2017.1)

◇日々、キリストへの献身を！(教団委員長川原崎 晃)

(前略) 私たちの教団の信仰は、当然のことながら日本伝道隊の信仰を受け継いでいます。それはバックストーン師やウィルクス師を通して与えられた聖書的聖潔に対する信仰であり、聖潔の危機的経験を通して、それが人格的聖潔となって歩み続ける「臨在信仰」です。さらに、教会性を有する教団の中において、各教会が臨在の主を仰ぎつつ自給自立を目指すことです。

そして、日本伝道隊が未伝地伝道、聖潔の指導、教職の養成という目的をもって活動してきたことの流れを汲んで、国内外の宣教の働きを拡大を進めるということです。

教団創立66年を迎えるこの年、改めてこの教団の教会であり、一員として繋がっていることを確認しています。そして、2017年度の教団標語の聖句として導かれたみことばを想

起しています。(中略)(伊^ヤ6:1~8)
(以下略)

イムヌエル綜合伝道団

◎「イムヌエル教報 NO. 843」(2016.10)

◇2020年を乗り越えるために(広報 川崎直行)

9月12,13日、本部会議室で定例の教団運営委員会が開かれました。(中略) 今回の会議の最も大きなテーマは、来る2020年にイムヌエル綜合伝道団の教会がどのような状況に置かれることになるのか、そして、それに対して、どのような対策を講じて行くべきかという問題でした。

現在の牧師の年齢構成を元に、2020年をシミュレーションしてみますと、主任牧師の年齢が80歳を超える教会が8教会、78歳を超える教会が8教会、75歳を超える教会が5教会、70歳を超える教会は31教会にのびります。退職される牧師は30名以上、10~20の教会が専任牧師が不在となり、兼牧や、統廃合しなければ立ち行かなくなるというシミュレーションです。多少、誤差はあるでしょうが、非常に厳しい現実には変わりありません。

牧師、伝道者を養成する聖宣神学院は、2017年の年会時に、信徒主体の後援会制度の発足式が持たれます。全国の教会から世話人を出して頂きたいという要望が出されています。地方の小さな教会にとりましては、とてもそんな余裕がないと思われるかもしれませんが、今、「教団から牧師や伝道者が送られてくるのが当たり前」という考えから、「自分たちの教会から、後継者のために祈り、送り出そう」という教会の意識改革が求められている。そうでなければ、立ち行かなくなります。(以下略)

◎「イムヌエル教報 NO. 845」(2016.12)

◇これからの5年間を展望して具体的な対策として教会グループ化を図る(国内教会局 内山 勝)

向こう5年の間に、30名以上の牧師が80歳を超えて現役を退かれることが予想される中で、どのような方策をもって対応するのかを、先日の国内教会局運営会議で話し合いました。(中略)

(Iコリント12:25-26) その方策としては、このみことばの通り、教会間協力に具体的に取り組み、互いに助け合う群れへと成熟することです。たとえば、以下の可能性を考えています。

・地域の数教会でグループを形成し、グループ内で協力して伝道・牧会を進めていきます。1教会1牧師(夫妻)担任という概念を外して、教会間の垣根を可能な限り低くし、牧師と信徒が協力して、できるだけ無牧教会をつくらないように、支え合うことです。

・遠距離でグループ形成が難しい場合は、1対1で姉妹教会となって協力し合うことも考えられます。たとえば、関東の比較的体力のある教会と北海道・あるいは九州など遠隔の教会が、互いに祈り合い交流を行うことによって、孤立を防ぎたいのです。

・前述の上記2つが難しいケースで、教会が希望する場合は、地域の友好的な教会との合流を選択することもありうるでしょうが、それは、どこまでも教会の意志を最大限尊重すべきと考えています。

・同地域に他の教会がなく、戦略的拠点として残すべきと判断される教会は、存続できるように、教団として積極的に支援する場合も考えられます。各教区において、是非議論してお考えをまとめていただきたいと願っています。(以下略)

◎「イマヌエル教報 NO. 846」(2017. 1)

◇ キリストにより同じ心、同じ判断を保つ努力

(広報 川崎直行)

11月21(月)と22(火)、通常の会議より長時間をかけて、今年最後の教団運営委員会を開催いたしました。(中略)

中心議題は、2020年までにイマヌエル教団が直面する牧師不足に、いかに対処して行くかということでした。国内教会局から提出された「国内教会将来のビジョン」に基づいて意見交換が行われました。(中略) 牧師の絶対数が不足して来る事態に対し、短期間、牧師夫妻が2教会を兼牧することは可能であっても、長期間継続して行くことには無理があるとの認識に立ち、これまでの1教会1牧師(夫妻)体制から、複数の牧師が担当するグループ牧会や、信徒伝道者の助けも借りながら、比較的大きな教会と小さな教会が姉妹教会となって支えて行く協力体制についても検討され

ています。距離が離れている等の理由で、イマヌエル教会同士が協力体制を取れない場合は、市内の近隣教会との協力体制を構築して行く必要性についても話し合われました。

教団の第二次組織改革について、検討がなされました。将来のOCCビル建て替え工事等も考慮に入れながら、本部の体制や神学院キャンパス運用、BA制度を含む部局の再編成についても討議されました。運営委員会における信徒の議決権、信徒代議員や信徒運営委員の選出方法についても成文化して行く方向性で進んでいます。(以下略)

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団

◎「アッセンブリー News NO. 736」(2017. 1)

◇ 教団総会報告

2016年年の教団総会は、昨年11月15日(火)～17日(木)の3日間、教団本部にある中央聖書神学校チャペル棟教室において開催された。(中略)2017年は「御霊による励ましと宣教の前進」という標語を掲げ、『一つになって』のサブタイトルが付けられた。その依拠する聖書箇所として使徒の働き9章31節が採り上げられた。今年度の方針案では、重点的に取り組むこととして、次の8項目がその具体的な内容を示して挙げられている。

1. 聖霊に満たされたキリストの祭司として日常的な祈りと交わりを強化します。
2. 宣教において一つになります。
3. 教団創立75周年(2024年)に向けて、具体的な指標を掲げます。
4. 教団創立75周年記念事業として、本部施設建て替えの計画を着実に進めます。
5. リノベートAG21を継続し、伝道、教育、組織、財務の見直しを進めます。
6. 中央聖書神学校との協力・連携を深め、これからの国内伝道と海外伝道の人材育成に努めます。
7. 世界のアッセンブリー教会に属するグループとの協力を推進します。
8. 現在の教団が直面する課題に取り組みます。(以下省略)

総予算は、2億4415万円で、並行して本部修繕改築の積み立ても行いつつ、宣教の前進を目指した予算案が提示された。方針案と予算案は最終日までオープン状態で審議を進めた。

日本福音キリスト教会連合

◎「JECA フォーラム NO.100」(2016.12)

◇ JECA25年目の確認～その理念と実際

(前全国運営委員長 松村 識)

(前略)

■JECA の理念、四つの中心

総会で確認した理念の中心は次の四つです。順に説明しましょう。

1. 共同の教会の具体化

(中略)「教会は、キリストをかしらとするからだとして、一つである。この祝福された事実は地上の教会のいとなみの中で告白され、証言されなければならない。同じ主によって建てられながら、それぞれの生い立ちの背景や、そのあり方、言語表現の違いなどによってへだてられた地域教会、教団が、出来る限りそのへだたりを解消し、聖なる共同の教会に属するものとしてよりふさわしいあり方の具体化を求めることは主のみこころであると信じる。」(以下省略)

2. 聖書信仰

(中略)「聖書は、旧新約66巻からなり、すべて神によって靈感された、誤りのない神のことばである。聖書は、神が救いについて啓示しようとしたすべてを含み、信仰と生活の唯一絶対の規範である。」(以下省略)

3. 自主・自立と協力

(中略)「自主・自立とは、主の御前に他に依存することなく、自らが自己決定する意思を持つ教会であり、それは、他を必要としないということではなく、むしろからだの一部として自発的、積極的に互いの間で重荷を負い合い、協力し合うことである。」(以下省略)

4. 宣教協力

(中略)「本協会連合の目的は、加盟教会の交わりを深め、各教会の健全な成長をはかり、また、日本および世界の信仰告白を同じくする諸教会、諸団体との協力関係を強化することによって、福音の前進をはかり、主のみからだの一部としての使命を達成することにある。」(以下省略)

◇ 新規加盟の三教会の紹介

加盟教会総数は190になりました！

1. 花の木キリスト教会(藤沢市)

牧師：伊東道夫

2. 長津田みなみキリスト教会(横浜市緑区)

牧師：油井義昭

3. 瀬戸一麦キリスト教会(瀬戸市)

牧師：伊藤恵一

学術雑誌の記事から

◎ 日本宣教に参考となるような文献をピックアップしてみました。

◇「キリストと世界 26号」

(東京基督教大学、2016. 3)

[講演]

「日本宣教—クリスチャン・ディアスポラの可能性」：倉沢正則

◇「伝道と神学 No. 6」

(東京神学大学、2016. 3)

[特別講演]

「アジアの文脈における日本伝道」：洛雲海

◇「宣教学ジャーナル 第10号」

(日本宣教学会・2016. 7)

[論文]

- ・「私たちは何を宣教するのか」：本田哲郎
- ・「J・ウェスレーと香川豊彦による社会宣教—『ジョン・ウェスレー信仰日誌』を手がかりに」：趙 永哲
- ・「周縁化された人々の包括的回復としての『神の国』宣教—バングラデシュや北インドの底辺層における宣教体験から」：柳沢美登里



あとがき

久し振りに「日本宣教ニュース」を皆様にお届けすることができることを感謝致します。言い訳になりますが、昨年は『「震災と信仰調査」報告書』、及び第6回日本伝道会議向けに出版した『データブック 日本宣教のこれからが見えてくる—キリスト教の30年後を読む—』の編集作業に追われ、「日本宣教ニュース」の発行にまで手が回らない状況でした。

今回の発行に当たり、改めてどのような情報を皆様にお届けしたらよいかを再検討し、内容の見直しを行いました。

今までは、雑誌や教団・教派の機関誌・ニュース等のタイトル紹介に留まっていたましたが、今回は、主として日本宣教に関わる各教団・教派の取り組み状況や考え方、方針等に関する記事を拾い集め、掲載することにしました。

各教団・教派の記事からうかがえるように「信徒減少による教会消滅の危機、財政破綻の危機」に代表されるような危機意識に立った動きや、「牧師の高齢化による牧師不足に伴う教会の統廃合」等の具体的な動きが進められているのが分かります。

このようなキリスト教会全体の状況に対し、第5回日本伝道会議で基調講演をされた竿代照夫師は、自教会・自教派中心主義を脱して、**協教派主義**への転換を訴えられました。その後、教団・教派の壁を超えた宣教協力の動きが各地域で起こされてきてはいますが、まだまだ十分とは言えない状況ではないかと思えます。

今緊急に求められているのは、巻頭言でも述べられていますが、第6回日本伝道会議で強調された、ローザンヌ誓約による個々の教会の意識変革(パラダイムシフト)であり、自教会・自教派中心主義からの脱却による「**地域宣教ネットワーク**」の構築ではないでしょうか。

今や、危機的な状況は都市とか地方に関係なく迫っています。従って、日本全国の全ての地域において、同じ地域に立てられている教会が協力し合って宣教を進める「**地域宣教**」に、真剣に取り組むことが求められていると言えるのではないかと思います。

(初穂)

献金者名

(2016年4月～2017年3月)

今年度も皆様の尊い献金により、JMRの活動をお支え下さり心より感謝申し上げます。ここに感謝を持って、2016年度のご報告をさせていただきます。2017年度も引き続き、JMRが日本の宣教のために用いられていきますよう、ご支援、ご加祈いただけますと幸いです。皆様の上にも主の限りない祝福をお祈り申し上げます。

【収入】

前年度繰越金	152,063
一般賛助会員献金	45,000
特別賛助会員献金	290,000
その他	33,000
収入合計	368,000

【支出】

事務・消耗品	62,667
通信費	9,744
印刷費	16,500
会議費	0
交通費	95,367
諸会費	63,000
広告代	17,100
支出合計	264,378

【次年度繰越金】 103,622円
(2017年3月23日現在)

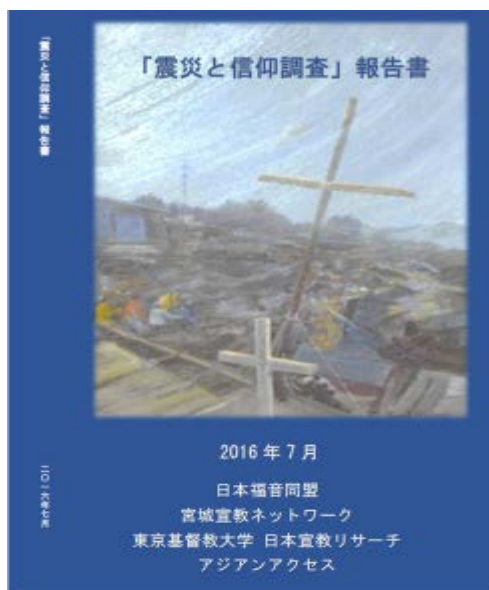
◎尊いご支援に、心から感謝申し上げます。
(敬称略)

金安信、崎山清、柴田美枝子、島田治夫、鈴木陽一、柳下弘、清瀬グレースチャペル、清瀬福音自由教会、センド国際宣教団、日本キリスト教連合会、日本キリスト合同教会、日本同盟基督教団、本郷台キリスト教会



◎ 『「震災と信仰調査」報告書』

購入ご希望の方は、東京基督教大学国際宣教センターまで。

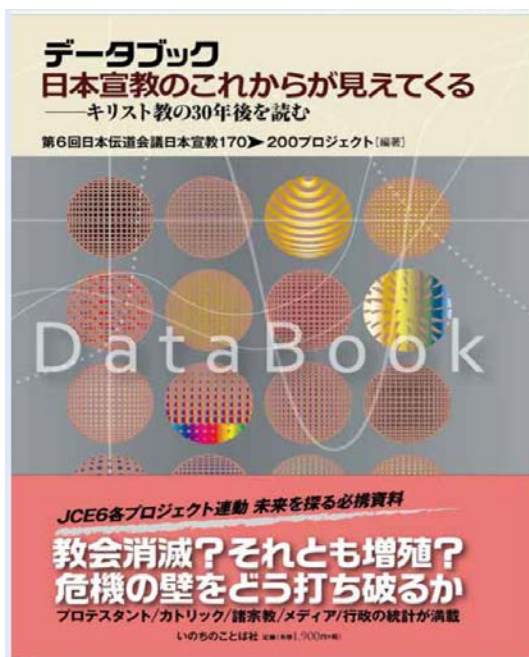


「震災と信仰調査」報告書

発行日：2016. 7. 20
 編著者：大友幸一
 柴田初男
 ヒューレットえり子
 発行：東京基督教大学
 国際宣教センター
 日本宣教リサーチ
 定価：1,000円＋税

◎ 『データブック 日本宣教のこれからが見えてくる
 —キリスト教の30年後を読む—』

全国キリスト教書店にて、販売中。



●過去と現状を分析し、宣教200年に向けた日本宣教の展望を概観、隠された可能性を掘り起こす。●プロテスタント／カトリックのみならず、諸宗教／メディア／行政機関などの統計データを駆使。

JCE6各プロジェクトの
 テーマに沿って議論に役立つ
 基礎資料を提供

定価（本体1,900円＋税）
 A5判 240頁

【編著】第6回日本伝道会議
 「日本宣教170>200プロジェクト」
 【協力】日本福音同盟（JEA）宣教委員会
 東京基督教大学 日本宣教リサーチ
 【発行】いのちのこぼ社 <http://www.wlpm.or.jp/>
 〒164-0001 東京都中野区中野 2-1-5
 tel.03-5341-6920 fax.03-5341-6921
 e-mail: publish@wlpm.or.jp

《おもな内容》

クリスチャン人口の推移と現状／全国教団・教派別教勢／受洗者数／CS出席者数／教会・教職者の状況／教職者と信徒の年齢構成／日本の人口推計と社会変動／宗教別人口／日本人の宗教意識／福音・宣教理解の流れ／キリスト教会の地域貢献・地域福祉の取り組み／都市と地方の格差／教会未設置地区と消滅可能性都市／開拓伝道の可能性／在日外国人（教会）の状況／来日宣教師の実状／海外在住日本人（教会）の実態／子ども・若者の状況／宗教学学校の現状／神学校の現状／メディア伝道の現状／「震災と信仰」調査ダイジェスト版 など

感謝のご報告と継続支援のお願い

日本宣教リサーチ (JMR) は、この4月で発足から4年目を迎えました。旧教会インフォメーションサービス (CIS) の支援者の継続的なご支援や、新たな支援者の方々のご支援をいただき、活動が支えられて来ましたことを心より感謝いたします。

2017年度は、JCE6「日本宣教170➤200プロジェクト」の流れを引き継ぎ、新たに JEA (日本福音同盟) 宣教委員会宣教研究部門の一員として、日本宣教の推進強化の働きに参画していくことになりました。

どうか引き続き JMR の働きにご期待くださり、更なるご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

JMR の活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

- (1) **特別賛助会員**：趣旨に賛同し、支援してくださる教団・教派、宣教団体等
 - ・一口 30,000 円 (何口でも)
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
 - ・毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」のご提供
 - ・毎年 1 回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート (詳細篇) のご提供
- (2) **一般賛助会員**：日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等
 - ・一口 2,000 円 (何口でも)
 - ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
 - ・毎年 2～4 回「日本宣教ニュース」のご提供
 - ・毎年 1 回「日本宣教に関する現状と分析」のレポート (概要編) のご提供

日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

東京基督教大学への寄付金 (献金) は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金 (献金) 額の約 50% となります。

詳しくは、☎0476-46-1131 (TCI 募金係) までお尋ねください

郵便振替口座: 00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

- * お振込みの際には、**振替用紙に「日本宣教リサーチ 指定」と必ずご記入ください。**
(振替用紙がお手元がない場合はこちらよりお送りいたします)



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ

【Japan Missions Research】

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5

学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内
TEL: 0476-31-5522 FAX: 0476-31-5521 E-mail: jmr@tci.ac.jp
<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一 (東京基督教大学大学院神学研究科委員長)
日本宣教リサーチ研究員 柴田 初男